

方向

第九三号 一九八八年一月二〇日

京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

十

如

目次

一 法華經巡礼 251

1988. 12. 16.

原田憲雄

ナーガールジュナ（龍樹）の『大智度論』の「如是我聞一時釈論」に次の一節がある。

「仏教の經典の初めになぜへこのように（如是）〜という言葉が出てくるのだろうか」答え「仏法の大海は、信によって入ることができ、智によって渡ることができ。へこのように〜という心こそ信なのだ。もし人が心に清らかな信をもつならば、この人は仏法に入ることができる。もし信がなければ仏法に入ることができない。信じない者はいふへこのことは、このようではない〜と。これが信じない姿だ。信じる者はへこれは、このようです〜という。なめしてない牛の革は、曲げようがない。信のない者もそのようなもの。なめした革は、必要に応じて何でも作れる。信のある者はこのようなものだ。経のなかにへ信は手のようなものと説く。手があれば、仏法という宝の山に入って、覺りなどの宝を自在につかみ取れるが、手がなければ何も取れない」

このような解釈は、いまの辞書風の解釈になれている我々には、中心をずれたコジツケ、よく言っても深読みと感ぜられるのではなからうか。だが『大智度論』の解釈は、おおむねこのような説きかたをしていて、文字の訓詁ではない。インドの經典の解釈法のひとつ「釈論」の典型、とみることができようか。そうしてこの解釈が

言おうとするのは、次のようなことであろう。

仏教の經典は、釈尊の弟子が、師の教えを伝えるために編集したものである。釈尊と弟子との結び付きは、弟子の自由意志からなされたものであった。弟子になつたのも、師は教えを強制したのではなく、弟子たちを身近かにとどめておこうとしたのでもない。戒律は次々に定められたが、これとて釈尊を中心としておのずから生れたサンガ、弟子や信者の集団が、清らかなサンガであり続けようとする集団の意志として、自発的に定められたのであつて、弟子であることをやめ、サンガから去つた者にまでおよぶのではない。釈尊を敬愛し、その教えを聞こうとする者だけが、弟子となり、信者となり、その弟子と信者の求めに応じて、釈尊は教えてきた。だから師弟の關係は、いまの学校の教師と生徒のそれとは違い、弟子が師を選んだのであつた。いったん弟子となつても、氣にいらなければ師弟の關係を解消することは、弟子や信者の自由だつた。しかし釈尊の死の直後、「哀しむことはない、こうせよ、ああするな、とうるさくいう人がいなくなったのだ。これからは自由にすればよい」と口走つた老僧がいて、これが經典結集の動機のひとつだつたことは有名である。老僧は、形のうへでは釈尊の弟子だつたが、心はなめされていらない革のように固く、耳は釈尊の教えにむかつて開く袋となつていなかったのであらう。釈尊の従兄弟で、アーナンダの兄弟であるデーヴァッタは、アーナンダとともに釈尊の弟子となりながら、厳格な戒律を主張し、師の教えをなまぬると批判し、釈尊にそむきおのれの教団を作つて対抗した。かれは中道という宝山に入りながら、宝をひらう手をもたなかつた。老僧もデーヴァッタも、釈尊の弟子とはなつたが、釈尊を信じてはいなかつた。だから釈尊の言葉が、身に染みず、心に沁みなかつた。

「このようにわたしは聞いた」という言葉が經典の初めに置かれるのは、長い間、身近かに付えたアーナンダが釈尊の言葉を誦え出す役を命ぜられ、「このようにわたしは聞いた」とことわって誦出したから、といわれる。自分の聞いたことがこのようだった、とは、師の言葉の語られた、時と、処と、聞き手と、動機と、言葉の形と、内容が、このようであったとの証言であり、証言はシャーリプトラがそれを素直に信じているからこそなされた。しかし聞き手としての自分の器量の至らなから誤り伝えるところがあるかもしれないから、そこは十分に批判訂正してほしい、という謙虚な反省にも裏付けられている。

アーナンダは、このように謙虚ではあったが、師の教えに盲従するのではなく、いったんは師が制止した女人の出家に手を貸して成功しているなどのことがある。シャーリプトラなどの長老は、アーナンダよりはるかに智慧においても持戒においてもすぐれたけれども、師の制止の向うにあるものを引き出す積極性においてはアーナンダに及ばぬ面があった。「大智度論」のいう信の柔軟性は、アーナンダの謙虚な態度を祖とし、師の言葉に信順しながら、言葉の表面には隠れた意味をも探ろうとする積極性を含むものであるに違いない。

信は、重要ではあるが、むつかしい問題で、純信と盲信との見分けが付けにくい。「法華経」の方便品は、このむつかしい問題に進み入ろうとするものようである。

さて、「如来こそ、シャーリプトラよ、如来の法を説くだらう、如来の知るそれらの法を。すべての法を、シャーリプトラよ、如来こそが説き、すべての法を、如来こそが知るのだ」は分かりにくい、妙本は「ただ仏と仏とのみ、すなわちよく諸法の実相を究尽す」と簡単に訳し、このほうが分かりやすい。梵文でいう「すべての

法」が妙本のいう「諸法の実相」であり、それを分けて説けば「それらの法は何か、それらの法はどのようなにあるのか、それらの法はどのように見えるのか、それらの法はどのような特質か、それらの法はどのような自性か」であり、いいかえると「これらの法が、何であり、如何にあり、いかに見え、いかなる特質、いかなる自性であるか」という五つの事項にまとめることができ、「これらの体系については、如来だけが、明らかに見えわめ、認めるのだ」という。こここのところを妙本は「(諸法実相と)謂う所は、諸法のかくのごときの相と、かくのごときの性と、かくのごときの体と、かくのごときの力と、かくのごときの作と、かくのごときの因と、かくのごときの縁と、かくのごときの果と、かくのごときの報と、かくのごときの本末究竟等なり」と訳す。「かくのごとき」は「如是」で、その如是につづくものを、①相 ②性 ③体 ④力 ⑤作 ⑥因 ⑦縁 ⑧果 ⑨報 ⑩本末究竟等の十にまとめているので、これを「十如是」という。

相は形相、性は特性、体は本質、力は能力、作は作用、因は原因、縁は条件、果は結果、報は果報、本末は相から報まで(すなわち本体と現象)、究竟等は徹底的に平等であることだとされる。梵本のどのテキストもここは五つにまとめてあって、妙本のように十項目を挙げるものはない。それで本田義英博士は、クマーラジーヴァが訳する時『大智度論』卷三五の九種法を参考にして展開変形したのだろうと推察し、それが定説となっている。天台大師智顛(五三八―五九七)は、この十如是を「是の相も如なり；是の報も如なり」「是くの如きの相；是くの如きの報」「相も是に如し；報も是に如す」と三種の読み方をし、これを空・仮・中の三諦に結び付けた。また、心の在り方に十如是を導入して、「一念三千」説を作り上げる。一瞬の心にも地獄・餓鬼・畜生・修羅・人

間・天上・声聞・緣覺（獨覺）・菩薩・仏の十界を具え、十界の一々がまた十界を具えるので百界。百界の一々に十如是を具えるので千となり、その千の一々が衆生世間・国土世間・五陰（五蘊）世間の三世間にわたっているので三千になる。なかなかむつかしいが、つまりはわれわれ平凡な人間の日常の一瞬々々のかすかな心にも三千の数で現わされた宇宙の一切の姿が完全に具わっている、ということである。このような考え方を核として天台教学の壮麗な体系を築き上げ、以後の中国・日本の仏教思潮を主導し、一般の思想にも影響を与え続ける。

天台教学で、十如是は五如是とするのが正しいといったら、大変なことになるだろうが、本末が究竟し、一切が円満に具備するなら、細部の項目は、立てかたによって五にも十にも百にも千にもしようだろう。西洋哲学におけるカテゴリー論争を参照しても事情は似たものである。ただ十という数は、多数をあらわし、円満完具をあらわすものとされたから、五如是というより十如是というほうが、魅力的で、人の心を納得させやすかったであろう。われわれは必要ならば、十如是に、いまの考えかたにおいて納得しうる n 個の項目を代入して差し支えない。

「方便品」の初めから十如是の終りまでは『法華経』前半のもっとも重要な部分とされ、ことに「如来、尊敬されるべき、正しく覺った人々は最高の希有なものを得たのだ」から後のところは『法華経』全体を要約しているので「略法華」とよび、尊重される。重複するが、妙本の文と、それに対する拙訳を掲げておく。

爾時世尊。從三昧。安詳而起。告舍利弗。諸佛智慧。甚深無量。其智慧門。難解難入。一切声聞。辟支仏。所不能知。所以者何。仏曾親近。百千万億。無數諸仏。尽行諸仏。無量道法。勇猛精進。名称普聞。成就甚

深。未曾有法。隨宜所說。意趣難解。舍利弗。吾從成仏已來。種種因緣。種種譬喩。廣演言教。無數方便。引導衆生。令離諸著。所以者何。如來方便。知見波羅蜜。皆已具足。舍利弗。如來知見。廣大深遠。無量無礙。力無所畏。禪定解脫三昧。深入無際。成就一切。未曾有法。舍利弗。如來能種種分別。巧說諸法。言辭柔軟。悅可衆心。舍利弗。取要言之。無量無辺。未曾有法。仏悉成就。止。舍利弗。不須復說。所以者何。仏所成就。第一希有。難解之法。唯仏与仏。乃能究尽。諸法実相。所謂諸法。如是相。如是性。如是體。如是力。如是作。如是因。如是緣。如是果。如是報。如是本末究竟等。

そのとき世尊は、みるべきものを見とおして、瞑想から静かに立ちあがり、シャーリプトラに告げられた。——もろもろの仏の智慧は、はなはだ深く見きわめがたく、その智慧の門は、わかりにくく入りがたく、教えを聞く道の人、おのれの覺りにやすんじる人たちには、知ることができないのだ。それはなぜかというところ、仏はかつて百千万億の無數の仏たちに近づき、その仏たちの無量の教えをことごとく実行し、心を奮い起こして精進し、その名はあまねく聞こえ、きわめて深く驚くべき教えを會得し、自由自在に説かれたので、その意味を覺ることが難しいからだ。シャーリプトラよ、わたしは仏になってこのかた、さまざまの因縁、さまざまの譬えによつて、ひろく教えをのべ、無數の方便によつて、人々を導き、もろもろの執着から離れさせた。如來は方便と知見の徳とをすでに備えているからである。シャーリプトラよ、如來の知見は広大で深遠であり、無量で妨げがなく、力は溢れ、自信に満ち、安定して自由であり、集中的で限界なく、一切の驚くべき教えを完成している。シャーリプトラよ、如來はさまざまに判斷することができ、もろもろの法

をたくみに説き、言葉やわらかに人々の心を喜ばす。シャーリプトラよ、つまり仏は無量無辺の驚くべき教えをことごとく完成しているのだ。シャーリプトラよ、それをさらに説明することはできないのだ。仏の完成したのは、第一級のきわめて稀な理解しがたい法であって、ただ仏だけが、仏の知っている存在の実相を究めつくす。すなわち存在とは、このような相のもの、このような本性のもの、このような本体のもの、このような力のあるもの、このような作用のもの、このような原因をもつもの、このような条件のもの、このような報いをもつものだと究め、ついに本体と現象とがひとつのものであると究めつくすのだ。

2.3. さて、世尊は、この意味をさらによく示そうとして、そのとき次の偈を説いた。――

無数の偉大な英雄たちが、諸天や人々の世界にいるが、

不可能だ、すべての衆生に指導者たちの一切を分らせるのは。(1)

かれらの力、解脱、畏れなき確信が、いかに見え、

仏の特性がどんなものかは、だれだって知りえない。(2)

さきにわたしは修行した、幾千万の仏のもとで、

深遠で、微妙で、知りがたく、見きわめがたいもろもろを。(3)

思量しがたい幾千万劫に修めた行の

果報を、覺りの壇でわたしは見た、それがどのようなものであるかを。(4)

わたしはよくよく知っている、ほかの世間の導師たちも、

それがどのような在り方、特徴、様態のものであるかを。(5)

それを示すことはできず、語りうる言葉もない、

述べるべき対象はなく、それを知りいかなる衆生も世間には存在しない。(6)

法を説き、説かれたものを理解する、いかなる者も、

信をもって旅立ったボサツたちを除いては。(7)

世間をよく知る方々の弟子で、スガタに奉仕して褒めたたえられ、

汚れなく、身は今生のみとなった者も、ジナの智慧には及びがたい。(8)

一切のこの世間が、かりにシャーリプトラにひとしい者で満ちていて、

かれらが一つになって想い起こそうと努めてもスガタの智慧は知りがたい。(9)

たとえあなたのような聡明な人たちが十方に満ちており、

またそのほかにわたしの弟子たちも同じようにいるとして。(10)

一つになって、スガタの智慧を想い起こそうとしたとしても、

その一切をあわせた力も、知ることはできぬ、わたしの無量の仏の智慧を。(11)

独覚で、汚れなく、感覺鋭く、今生のみの身となった人々が、

森の芦むら竹やぶさながら、十方に満ちていて。(12)

一つになって、わたしの無上道のかたはしばかりを想い起こそうとしたところで、

幾千万億無量劫かけても、真実の意味はわかるまい。(13)

新しい乗り物で旅立つボサツたち、幾千万もの多くの仏に供養して、

深い意味を理解するあまたの法師が十方にあふれ、(14)

つねに芦むら竹やぶのよう、一切世間にひまなく満ち、

一つになって、スガタがその目で見た法を、想い起こそうとしたところで、(15)

ガンジス河の砂ほど無量な幾千万億多劫のあいだ、

微妙な智慧で専念しても、かれらの知識の及ばぬところだ。(16)

不退転のボサツたちが、ガンジス河の砂ほど多くて、

心を一つに想い起こそうとしたところで、かれらの知識の及ばぬところ。(17)

深遠で微妙な法は、思議をこえ、汚れなく、覺られる、

わたしこそそれがどのようなものかを知っていて、十方世界のジナも同じだ。(18)

シャーリブトラよ、スガタが説けば、そのことを深く信ぜよ。

ジナは偉大な聖仙で、誤りを語ることはなく、久しく真実を述べてきた。(19)

わたしは告げる、一切の声聞と、独覺への道に旅立つ者に、

きみたちを涅槃に住まわせ、不断の苦から解き放ったが、(20)

これこそわたしの無上に巧みな方便だ、世間にあまたの法を説き、

あれこれに執着する者を解脱させ、三乗につき解き明かすため。(21)

atha khalu bhagavān etaṁ evārthaṁ bhūyasvā mātṛayā saṁdarśayamaṇas tasyāṁ velāyāṁ imā gāthā
abhāsata //

aprameyā mahāvīrā loke samaru-mānuse /

na śakyaṁ sarvaśo jñātum sarvasattvair vināyakāḥ // 1//

balā vimokśās ca ye tesāṁ vaiśaradyās ca yādṛśāḥ /

yādṛśā buddha-dharmās ca na śakyaṁ jñātu kenacit // 2//

pūrve niśevitā caryā buddha-kotīna antike /

gambhīrā caiva sūksmā ca durvijñeyā sudurdrśā // 3//

tasyāṁ cīrṇāya caryāyāṁ kalpa-kotyo acintyā /

phalaṁ me bodhiṁgāḍhasmin dr̥ṣṭaṁ yādṛśakaṁ hi tat // 4//

ahaṁ ca tatprajānāmi ye cānye lokanāyakāḥ /

yathā yad yādṛśaṁ cāpi lakṣaṇaṁ cāsya yādṛśaṁ // 5//

na tad darśayitum śakyaṁ vyāhāro 'sya na vidyate /

nāpi asau tādr̥śāḥ kaścit sattvo loke 'smi vidyate // 6//

yasya taṁ deśayed dharmam deśitam capi jāniyāt /

anyatra bodhisattvebhyo adhimuktīya ye sthitāḥ # 7#
 ye cāpi te lokaviduṣya śrāvakāḥ kṛtādikārāḥ sugatānunarṇitāḥ /
 ksīṇāsṛavā antimadeha-dhāriṇo na teṣa viśayo 'sti jināna jñāne # 8#
 sacaiva sarvā iya lokadhātu pūrṇā bhavec chārisutopamānāḥ /
 ekībhavitvānūvicintayuh sugatasya jñānaḥ na hi śakya jānitum # 9#
 sace ha tvay sādṛśakehi paṇḍitaiḥ pūrṇā bhaveyur daśa pi ddiśāyo /
 ye cāpi mahyaḥ imi śrāvakā 'nye teṣāḥ pi pūrṇā bhavi evaḥ eva # 10#
 ekībhavitvāna ca te 'dya sarve vicintayuh sugatasya jñānaḥ /
 na śakta sarve sahitā pi jñātum yac cāpṛameyaḥ mama buddhajañānaḥ # 11#
 pratyekabuddhāna anāsravāṇāḥ tīksendriyāṇāntimadeha-dhāriṇāḥ /
 diśo daśa sarva bhaveyu pūrṇā yathā naḍānāḥ vana-veṇunāḥ va # 12#
 ekībhavitvāna vicintayeyur mamaḡradharmaṇa pradeśa-mātram /
 kalpāna koṭī-nayutān na tasya bhūtaḥ pariḡāni artham # 13#
 nava-yāna-saṃprasthita bodhisattvāḥ kṛtābhikārā bahu-buddha-koṭiṣu /
 suvinīścitārthā bahu-dharmabhāṅakās teṣāḥ pi pūrṇā daś imā diśo bhavet # 14#
 naḍāna veṇūna ca natya-kālam acchridra pūrṇo bhavi sarva-lokaḥ /

ekibhavitvāna vicintayeyur yo dharmā sakṣāt sugatena dr̥ṣṭāḥ || 15||
 anucintayitvā bahu-kalpa-koṭyo gaṅgā yathā vālika aprameyāḥ /
 ananyacittāḥ sukhāyā prajñayā tesāṃ pi cāsmiṃ viśayo na vidyate || 16||
 avivartikā ye bhavi bodhisattvā analpakā yatha-r-iva gaṅga-vālikāḥ /
 ananyacittās ca vicintayeyus tesāṃ pi cāsmiṃ viśayo na vidyate || 17||
 gaṃbhira-dharmā sakharṃ pi buddhā atarikāḥ sarvi anāsravās ca /
 ahaṃ ca jānāmi ha yādṛśā hi te ye vā jina loki dasāddisāsū || 18||
 yaṃ śāriputra sugataḥ prabhāṣate abhimukti-saṃpanna bhavāhi tatra /
 ananyathāvādi jino maharṣi cireṇa pī bhasati uttamārtham || 19||
 āmantrayāmi imi sarva-śrāvakāṃ pratyekaboddhāya ca ye 'bhiprasthitāḥ /
 saṃsthāpitā ye mama nirvṛtīya saṃmokṣitā duḥkha-paramparātāḥ || 20||
 upāyakausalāya mam etad agraṃ bhāṣāmi dharmam bahu yena loke /
 tahiṃ tahiṃ lagna pramocayāmi trīṇi ca yānāny upadarśayāmi || 21||

ここからは重頌で、前の散文で述べたことの繰り返し返したが、これも前にたびたび言ったように、ふたつはびつたり同じというわけがなく、その違ったところが互いに補い合う。

第七頌までと第八頌以下とは韻律が変わっていて、正本は第七頌までを五字句で、第八頌以下は四字句でと訳

しわけ、妙本は區別せず五字句で訳す。

「偉大な英雄」「指導者」「世間の導師」「世間をよく知る方」「ジナ」「スガタ」はみな仏の呼び名であり、ジナは勝者、スガタは善く逝ける者すなわち完全に覺つた人の意であること、これまた前に述べた。

「森の芦むら竹やぶ」を正本が「甘蔗竹蘆葦」「稲麻叢林」、妙本が「稲麻竹葦」と訳し、「ガンジス河の砂」を正本が「恒辺沙」「江河沙」、妙本が「恒河沙」「恒沙」とするのを見ると、翻訳者の苦勞が察せられる。また、第二頌の *vimokṣāś ca ye* を萩原・土田のローマ字本が、これでは韻律が合わないからというので他のテキストを参照して *vimokṣā ye* と改め、第十八頌の *sakāra* を底本が *sikhāra* としているのなど、それぞれに校訂者の勞に感謝せざるをえない。新しいテキストがつつぎにみえるようになった今日の研究者によって批判されるのは当然だが、それを見ることができずに、身と心を振り絞るように辛勤した先人の作業を、今の目であざ笑うことはできない。(わたしの語学力では、そんな感想を述べるのも僭越かもしれぬが)

この偈が、力をこめて説くのは、仏の智慧は、他の者には理解しがたい、というところであり、妙本の十如是に当たるのは第四、五頌あたりであろうが、特に強調しているようでもない。諸法実相が『法華經』にとっての重要な考え方であることは勿論だが、方便品から十如是を抜き出し強調するのは、『法華經』本来の説き方とはいえず、新しい宗教を建立しようとした天台大師の哲学とでも見るほうがふさわしい。わたしが幼いころから触れてきた信仰のかたちは、天台教学に由来するが、梵本と正本・妙本を読み合わせていると、妙本から伺いうるクマーラジーヴァの伝えた『法華經』に、いまこそ素直に耳を傾けねば……という気がする。

「覚りの境」を妙本は「道場」とする。好訳だが、現在の日本語の語感では軽すぎるのでとらなかつた。「想起こそす」は「熟考・熟思する」の意で、妙本が「尽思」とする。それでもよいのだが、序品の文殊の言葉にあつた「想起」がここにも響いているはずで、思考というものも、人間の無意識界を含むすべての過去への検索と見ることもでき、ここではそこまで突っ込んだ発言と考えられるので、あえて拙訳のようにした。

涅槃という絶対の安静に到達し、生命のもつ苦悩から解放されること、それが、釈尊がシャーリプトラなど弟子たちに教えてきたことであり、その状態に到達することが修行の目的とされた。それは釈尊の弟子たちの間だけでなく、当時のインドの思想家、宗教家のほとんどすべてにとつてもそうであり、独力でその境地に達した独覚たちは、それ以外に、それ以上の境地があろうとは夢にも思わなかつた。

だれもが夢にも思わぬところ、そこにこそ仏の問題領域がある、ということが、これから語られようとする。理解を絶するのは当然で、理解を絶するということさえ、人々には理解しがたい、というのである。

『法華経』を学びはじめた若いころに、ここらがほんとうに分かりにくかつた。今でも理解できているとは言えないが、いくら説明されても分からないことがあること、分かるためには自分が分かるところまで到達するほかないといった消息は、ほのかに感ぜられるようになった。

教え方や、学び方が、親切丁寧であることがよいのは確かだが、突き放されてはじめて納得するという学び方があるのも事実で、だから『論語』にも「もたえずんば教えず」というのであろう。

※前号正誤 一九頁八行 ありかた体得し↓ありかたを体得し

何れか貴船へ参る道 賀茂川みのさと御菩薩池（みどろいけ） 御菩薩坂 畑板篠坂や一二の橋

山河さらさら岩枕

山河さらさら岩枕というのがなんともいえざわやかでいい。葉ずれの音、水の音、衣の音が聞こえる。この梁塵秘抄を撰した後白河法皇は、歌謡がすきで、うたい手を呼んでうたわせ、自らもうたい、喉から血が出るまでうたったのだなどと聞いたことがある。

梁塵秘抄の口伝集によると、へ昼はひねもすうたひ暮らし、夜はよもすがら唄ひ明さぬ夜はなかりきとあり、またへ声をわる事三ヶ度なり。二度は法の如くうたひかはして、声の出るまで歌ひ出したりき。あまりせめしかば、喉はれて、湯水通ひしもすじなかりしかど、かまへてうたひ出しき。とある。太鼓、しょうひちりき、こと、びわ、和ごんなどを伴奏にしてうたつたとあるが、大勢の人が疲れ、もうろうとしている様を想像すると何となく切ない。

私たちが貴船へ出かけたのは、紅葉の美しい十一月中頃だった。出町柳を九時三十二分発の鞍馬行き電車に乗った。宝ヶ池で八瀬行きの線路とわかれると、まだ畑や山林の残る自然の中を走って行く。中年の女性グループや遠足の子どもたちで、一両だけの電車は満員、十時少し前に貴船口に着いた。ほとんどの人が終着の鞍馬まで行くので、一つ手前の貴船口で降りたのは、三人の女性グループと私たちだけである。

紅葉した木々にかこまれた山間の貴船口は、無人の駅でありながら、ホームには朱塗りの柵をめぐらして晴れやかであった。ホームのすぐ先に貴船川が流れていて、私たちを降ろした電車は川を渡り、山の中に消えていった。ホームからなだらかな石段を下ると、雨に濡れたような山陰の道である。透明な水がたっぷり流れる貴船川と美しい紅葉、その川にかかる橋の欄干も朱に塗られて、材はセメントや鉄であるが、黒い擬宝珠ものっている。あまりの美しさ静かさに心をうばわれて、呆然と歩き出した私たちは、駅近くの川端に鉄輪掛岩（かなわかけいわ）と蜚岩のあったことに気がつかなかった。

いずれか貴船へ参る道、今はアスファルトで固められた自動車道路になっているが、何百年も昔、和泉式部もこの辺りを行ったのかと思うと不思議な気がする。暗い山路だったのだろう、遠い道のりで日も暮れてしまったことだろう。想像の及ばないことであるが、後拾遺和歌集の中に式部の歌があり、神社の要誌にも出ている。

男に忘れて侍りけるころ、貴布祢に参りて、御手洗川に蜚の飛び侍りけるを見てよめる。

ものおもへば沢の蜚もわが身より

あくがれいづる魂かとぞみる

今この明るい秋の道には、とつととあるいて行く三人の元気な女性と、後からふわふわと歩いている私たち二人の他に誰も見えない。朱色の小さな社がまつられていたり、北山杉の間の少し暗い所があったり、この山全体が貴船の神の領地のような。そういうえば駅の近くで掃除道具をもった人たちが、道端に腰をおろして休んでいたのを、何気なく見て過ぎて来たが、神社に関係のある人が道を掃除していたらしい。

川と道はもつれるように何度か橋を渡り、よじれて右に左に入れ代る。散る季節も近い紅葉は燃えるように赤い。見上げると高い山の上にも紅葉した落葉樹の帯が見える。時々私たちを追い抜いて行く自動車があるけれど、その数は少ない。小さいブリキの板が木に吊り下げてあって、たしか、

「オルゴールを鳴らしてバスが参ります。手をあげて乗り降り自由です。どうぞご利用ください。」
というようなことが書いてあった。しかし私たちが歩いている間には、そういうバスは来なかった。

私が貴船に行ってみたいと思っていたのは、画家、森田曠平さんの「貴船」「御手洗川」を知ってからである。「御手洗川」は、流れの上に螢がぼつぼつと光を放っていて、川岸にうずくまった女の人が、それをじつと見守っている。和泉式部の歌によるものである。

貴船は水を司どる神、高麗たかを祭神とする。京の都ではどんなに日照りがつづいても、中京から下京にかけて町家の井戸は枯れなかった。理由は地下の水脈にあるらしいが、昔は貴船神のお守りによると言伝えられ、特に台所をあずかる女たちの信仰を集めたのだそうである。江戸時代には丑の刻参りで知られ、わが家の井戸水で身を清めて貴船神へ参り、帰ってふたたび井戸水を飲むと、夫の浮気がおさまると伝えられていた。この神社のあたりの古い枯木には、丑の刻に打たれた古釘がいまでもみつかることがあると『京の裏道』という本に出ている。

森田さんの「貴船」は、何れか貴船へ参る道、という梁塵秘抄の歌に、能の「鉄輪」を重ねて制作されたということである。「鉄輪」は、丑の刻参りを題材にした能で、『平家物語』または『太平記』の宇治の橋姫の話に影響を受けているといわれる。宇治の橋姫は嫉妬の女が貴船明神に祈って、復讐の鬼になる話である。その様子

は、参考書によると、

長ナル髪ヲ五二分テ、松脂ヲ塗り、巻上テ、五ノ角ヲ作ケリ。面ニハ朱ヲ指、身ニハ丹ヲ塗り、頭ニハ金輪ヲ頂キ、繞松三把ニ火ヲ付テ、中ヲ口ニクハヘツツ、夜更人定テ後、大和大路走出テ南ヲ差シテ行ケレバ、頭ヨリ五ノ炎村燃上ル。是ニ行会タル者ハ、肝心ヲ失テ倒伏、不死人ト言事ナシ。

というのであるが、「貴船」に描かれているのはそういう形の人ではない。美しい着物にまた小袖を頭からかぶり、胸から肩に紐をまわして、後ろで結んで押さえている。顔は目がきびしくて、ただ一点に集中された心を表わしている。その表情は般若のようにも見えて、大変に美しい。川に沿った山道を、杖をつけて素足にぞうりをはき、風を切るようにいそぎ足に登って行く。夜中の十二時を過ぎた時刻に、下京あたりから何時間もかけて、この山まで来るのだから、よほどのことである。命も何も捨ててしまっていなければ、どうしてこんなことができるだろうか。追いはぎが出る、足が痛いなどと考えていたらできないことではない。

丑の刻参りというのは、人に見つからない特定の場所の木に、呪う相手をかたどった藁人形をくくりつけておいて、丑三つ時、頭に火をともしたらうそくを鉢巻きでゆわえつけ、口には櫛をくわえ、腰には一反の木綿をたらし、これが地につかないように駆けて行き、その人形に釘を打ちつけて来る。それを特定の日数つづける。途中で人に会うと効果がないということである。

能「鉄輪」は、自分を捨てて別の妻を迎えた夫を忘れられず、恨めしくもあり、ときには懐かしくもあり、その苦しみのあまりに夫と後妻を呪う女の気持ち語っている。

げにや蜘蛛の家に荒れたる胸は繋ぐとも 二道かくるあだ人を頼まじとこそ思ひしに 人の偽り未知らで契り初めにし悔しさも ただわれからの心なり あまり思ふも苦しさに貴船の宮に詣でつつ 住むかひもなき同じ世のうちに報ひを見せ給へと 頼みをかけてきぶねがは 早く歩みを運ばんと、貴船に参るわけを語る。

通ひ馴れたる道の末 夜もただすのかはらぬは 思ひに沈むみぞろいけ 生けるかひなきうき身の 消えんほどとや草深き 市原野辺の露分けて 月遅き夜のくらまがは 橋を過ぐればほどもなく きぶねの宮に着きにけり

今ではただすの森もみどろ池も町中になり、市原あたりは住宅街がひらけている。女は貴船に着いてすぐ、待っていた神官から、夢の告によって女の願いが、貴船の神に聞きとどけられたことを知らされる。家に帰って告げられたとうり、火鉢の火の上などに立てる足のついた鉄の輪に、火をともしたらうそくを立てて頭に頂き、緋の衣を着て怒りをこめ、鬼になる。その夜鬼女が夫を呪い殺そうとするが、昼間のうちに何となく胸さわぎを感じた夫は、安倍晴明に祈ってもらって難を逃れる。鬼となった女は恨みながら退散するのであるが、貴船の神が陰陽師晴明によって祈りかえられてしまうのだろうか。この能は作者不祥とされている。

宇治の橋姫が鉄輪を置いたと伝えられるのが鉄輪掛岩である。私はこの能などから貴船を想像していたので、なんとなく恐ろしくて一人で行けず、主人をむりにひっぱって出掛けて行った。山間の静かな道はこの上もなく美しかったがやはり一人では寂しい。

一の鳥居がすぐそこに見える頃、足を止めてふと気がつく、鳥帽子岩という立札があって、川の向う岸にあまり大きくない岩があった。「え、ぼしのような形をしてないな」と立札を読んでみると、貴船に参る大宮人が鳥帽子を下ろして置き、身を整えた岩であると書いてあった。昔の道はその辺り、すぐ川の岸を通っていたのだろう。今の道は石垣の上に川より高く造られているので、川の水にふれることはできない。

鳥居をくぐって料理店や材木置場らしい広場の間の道にはいった。ひっそりとして人影がない。少し行くと両側に料理店の並ぶ道は急に狭くなったようで、温泉町にでも来たような雰囲気が一瞬あり、水が打たれた坂道をかすりの着物に赤いたすき、前掛けをした女の人が横切って行った。すぐそこが神社の登り口で、道の左寄りに鳥居があり、朱塗りの一本足の燈籠がずらりと石段に添って並んでいる。拝殿まで登ると貴船山の山腹を切り開いた境内に、高い石垣が積まれて山から水が浸み出し、したたり落ちている。水神を祭るといっているので、酒造家の信仰が篤いこともうなづかれる。電車を降りてからここまで、歩くこと三十分の距離であった。ここから更に、五百メートルほど北に入ると奥宮がある。ずっと昔、社殿が大水に流されて今の地に流れ着いたので、この地に移し、もとの地に奥宮が創建されたのが、一千五十五年のことだと案内に書かれている。桓武帝以前から信仰を集めていた古い神社だという。

奥宮までの途中に「結宮」と書いて、むすびのみや、またはゆうのみやと呼ぶ小さな社があつた。あらゆることの縁結びに信仰され、境内のススキのような、細長い葉を結び合わせて祈念すれば、靈験あらたかだという。私も枯れたススキの葉を拾って、娘のために結んでおいた。よけいなお世話だと言われるだろうか。小さな社は

和泉式部と螢の絵馬に埋まっている。そこから少し行って、相生千年の大杉が並び立つ神木の下を通り、奥宮の参道の入口で思ひ川という小川を渡る。

藤原時房

おもふことなる川上にあとたれて

貴布祢は人を渡すなりけり

ほんの一飛びほどの川だが、前に朱の鳥居があつて朱の橋がかかっている。川は貴船山の奥からきて、貴船川に流れこむが水は枯れていた。

参道は大杉の並木を右手にして、山の下を通りまっすぐ奥宮の朱い小さな門に着く。中は広い境内で左は貴船山、右に石柱の柵をめぐらして外に芹生への道を通じる。その道のむこうが貴船川をはさんで鞍馬山である。谷間であるから、光の射すのは太陽が上を通る間だけなのだろう、しつとりと土や落葉の匂うような所であった。その広場の奥の方に拜殿と奥宮の本殿がある。奥宮にもまたたくさんの絵馬が掛けられていた。旁に船形石という大きな石組みがあり、神武天皇の母である玉依姫が、水源を求めてたどり着いた黄船が、中に封じてあると説明されていた。しかし貴船神社のきぶねの由来は、『直樹生嶺』であると考えるのがわかりやすい。

広場の中程、少し道路の方へ寄つた所に、能「鉄輪」について、謡曲保存会が説明した立札があつた。その終りに、丑の刻参りは祭神が、丑年丑月丑日丑刻に降臨されたと伝える古事によるもので、人々のあらゆる心願成就に靈験あらたかであり、単に呪いにのみとどめるべきものではないと書かれている。神社の説明にもへ諺に、

父母の恩に答え得るとも水の恩は返し得ずと言われる如く、一切の生物は寸時も靈沢を仰がずして生存はかなわず：とある。誰の恩にも答えるのはむつかしいが、言われてみればもつともなことである。丑の刻参りは貴船神社にかぎらず、多賀神社の参詣曼陀羅にも、鉄輪を頂く白衣の丑の刻参りの女が、描かれているということである。

奥宮からおなじ参道を引き返して、料理店のちかくまで帰って来ると、かすりの着物に赤いたすきをかけた人が「お昼どうぞ、あがっていっとくれやす。」と通る人に声をかけていた。夏の納涼の季節や紅葉でも休日などは満員だろうが、この日はほんとうに人が少なかつた。

貴船はひっそりとして気品をそなえた奥地であり、ととのつた美しい宮であった。へいずれか貴船へ参る道山河さらさら岩枕」という気配は十分にのこっている。音楽をならしてバスが来ますというけれど、もう一度、一人だけに行くには心もとない。ふたを閉じてそっとしておきたい玉手箱のような、別の世界として私の心に残った。

森田さんの「貴船」に描かれた、鬼神のような美しい人は、貴船の山川でありその靈氣であり、今なお古い世の香りを失っていない、貴船そのものなのだという気がした。

黒田 徹 『風のなか』『僕のコリアン・グラフィティ』

1989. 1. 15. 原田憲雄

『風のなか』は、著者二〇歳代後半の詩二二篇を収める第一詩集。

……髪は火がつくくらい熱かった／木陰にはいつて一服、／ここから見ると／畑は水平線まで続いている
ようだ／郵便局は白一色だった／それでも／ポールペンだけは動かした／二三の文字が／はみでたかもしれない
ない／ほとんどの文字が／はみでたかもしれない／君が受け取るべき／葉書から／僕の文字は／はみでてし
まったかもしれない（島の頂の郵便局）

ほとんどがこのような恋愛詩で、「乾燥期」の句でいえば（悲しい歌ばかりだが、（音色）は（乾き）、
富士正晴氏の「序」にいう（冷たい快感）を覚えさせ、次の句などはいかにも男性的である。

割箸いっほん片手にもって／夕焼け空をかきまわす（オレンジ色の綿がし菓子）

『僕のコリアン・グラフィティ』は（知り合いの小説家のおっさん）から「韓国語はみなやりたがらん。おま
えやれ」とすすめられて外国語大学の朝鮮語科に入った学生が、一九七二年、韓国語を知らない在日韓国人の青
年と韓国旅行をする話。雑誌『ヴァイキング』に連載中、愉快な旅行記としてよんでいたのだが、一冊にまとめ
られたのを読み返して、ああこれは（小説）だったんだな、と思った。山田稔氏が、行き届いた跋文を書き、高
岡多恵子氏が好意的な批評を書いていると聞いた。いま『ヴァイキング』の編集者として忙しいようで、その編
集後記がいにはあまり作品を見かけないが、若い人だから、詩も、小説もどんどん書いてもらいたい。

船 船 兵 と ネズミ

1988. 12. 7.

柴野純孝

拝啓 方向、御恵与、御礼申し上げます。御宅のネズミの件、昔ビワ湖で源五郎鮒を捕えた貴兄の事がしのばれ

ます、さてネズミの事です、小生南方乗船中、かがとの厚い皮を、全部そっくり、かじられた事が二度ありました。昏睡中鈍い神経をつきさす様な痛みで目が醒め、見ると、かがとは皮がなく真っ赤な肉と血だけでした。救命具の古い綿をとり出し、傷に当てていましたが、薬も消毒もなしでしたが数日で治りました。夜中ワッチに立つと百匹位が集団で移行する月光下の風景は空おそろしい気もしました。以後必ず毛布で足を巻いてねる事になりました。合掌

へ右は、前号の原田慶「鼻曲りのネズミ」につき読後感を示された柴野氏の葉書。許しを得て掲げる。「昔」というのは、一九三七年頃の夏、柴野、赤谷明海の両君とわたしが、ゲタばきで洛北の修学院から比叡山に登り、雷雨に遭い、山上の鐘樓だったか、宿坊だったかで一夜を明かし、次の日、琵琶湖に下り、ボートを漕ぎ出した。蜂が水面に急降下する。見ると、大きな源五郎鮒が躍り上がった。蜂に刺されたらしい。いったん沈むが、ゆらゆら浮かび上がり、漂よう。わたしは思わず水にとびこみ、かなり苦勞したが鮒をとらえ、ボートに投げ入れた。しかし飛び込んだはずみに眼鏡を落とし、往生した。「南方乗船中」は、第二次大戦で、柴野君が暁部隊の機関銃手として南太平洋を往来する船舶に乗っていたことをいう。その体験を一書にまとめた『わだつみをこえて』は、本誌第八八号に紹介した。ネズミのことはなく、ほかにも書き漏らした話があるらしい。書いてもらえば、また掲げたい。あの戦争で、どれだけ多くの、死にたくない人たちが死に、死なせたくない人たちが死んでいったか知れない。生き残った者も、死んだ人に対する、やましき、くやしき、つらさを、呑み込んで、むさんに生きていくのだ。死者がよみがえらぬのに、謳歌しうる太平なんぞは、ない。一九八九年一月一五日、原田憲雄